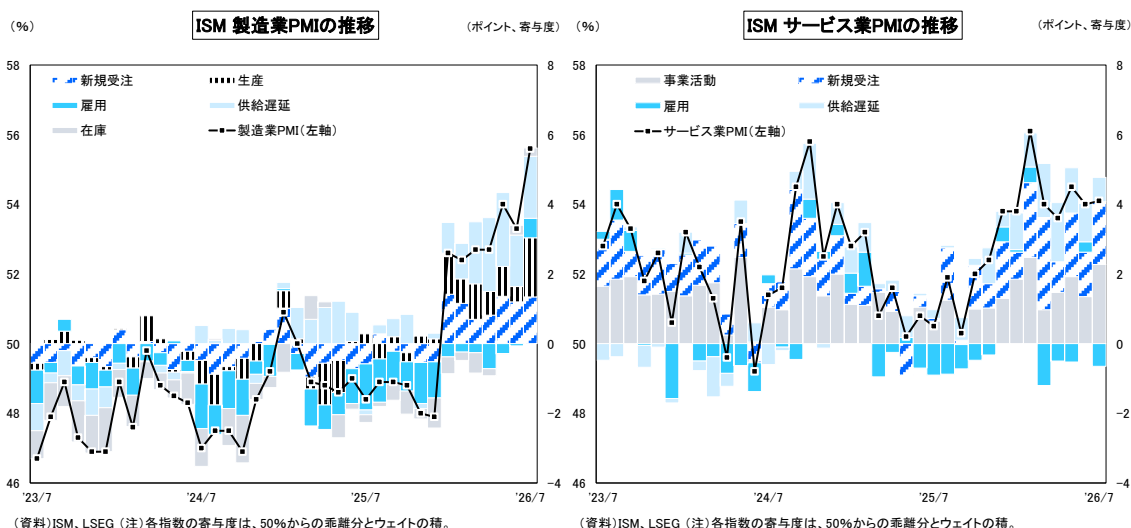


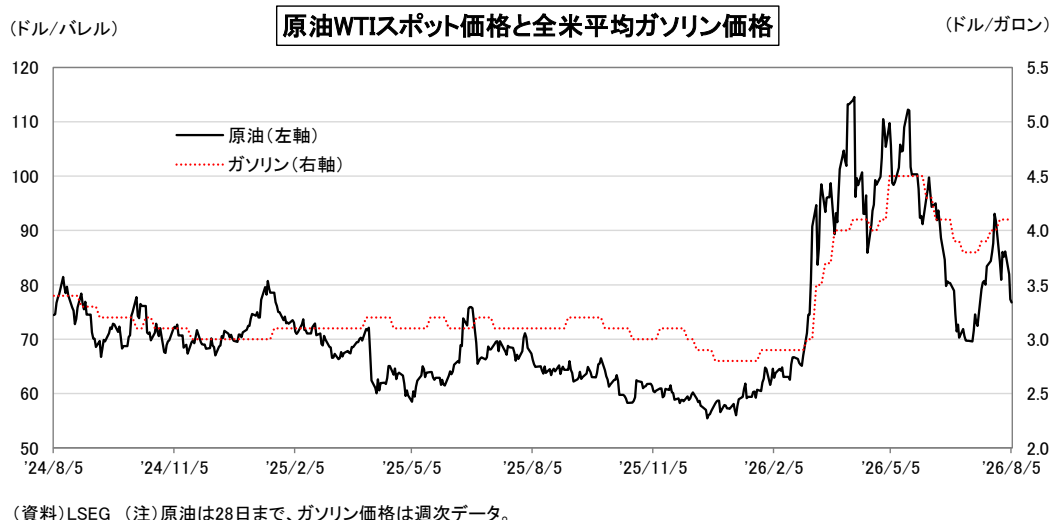
(米国)好調な7月ISM指数、疑問が残る7月FOMC

7月のISM景況指数をみると、製造業指数は前月から+2.3ポイントの55.6%と、判断基準となる50%を7か月連続で上回り拡大局面を示した。また、サービス業指数は同+0.1ポイントの54.1%と25か月連続で拡大局面を示した。

価格指数については、製造業が同1.9ポイントの71.1%、サービス業は同+2.6ポイントの70.3%となり、いずれも上昇傾向が強いことがうかがえる。雇用指数については、製造業が52.8%と34か月ぶりに拡大傾向となった。一方、サービス業は47.4%と2か月ぶりに縮小傾向を示した。全体としては、企業部門の好調な拡大が継続していることがうかがえる内容といえる。



足もとの原油価格をみると、イランとオマーン間でホルムズ海峡の通行をめぐる交渉が大詰めとなっているとの報道から、下落基調となっている。一方で、イランは米国とは協議していないことから、先行きは不透明ともいえそうだ。



7月のFOMCを振り返ると、政策金利は3.5～3.75%で据え置きとなった。賛成9、反対3の投票結果となり、反対した3人のFOMC参加者は0.25%の利上げを支持した。

FOMC後の記者会見にてウォーシュFRB議長は、市場への情報を与えないことによって、市場に独自に判断させることを意識し、今後の政策金利見通しなどについては一切触れなかった。一方で、最近の2年債利回りの上昇などは、マーケットが独自に判断した結果であるとし、FRBが経済分析を行う際に利用できる情報源として有益であるとの評価を与えた。また、FRBが利上げしなくても、そうした利回り上昇の結果、引き締め効果が生じたとも述べた。

筆者の印象としては、FOMC後の記者会見は、記者からの具体的な質問とFRB議長からの抽象的・基本的な回答が続いたことから、話がかみ合っておらず、ある意味では禅問答の様相が強かった。

そのうえで、疑問点としては、上記のようにマーケットの価格付けを歓迎するのであれば、FRBの政策金利操作はマーケットの後追いとなる可能性が高まるのではないかという点である。ウォーシュFRB議長は市場にサプライズを与える意図はないとも話している。一方で、マーケットを情報源とするが、どのような情報を取得するかについては明確に述べていない。こうした方針をどのように解釈すれば良いだろうか。

7月FOMC後の記者会見は、市場への情報を与えない方針で行われたことから、筆者の政策金利見通しは変化がなく、9月FOMCでの利上げ確率を50%程度と考えている。基本的には従来どおりの、インフレ率や雇用状況からFRBの行動を予想することとなるため、今後発表される経済指標次第で、確率評価を更新することとなる。

